

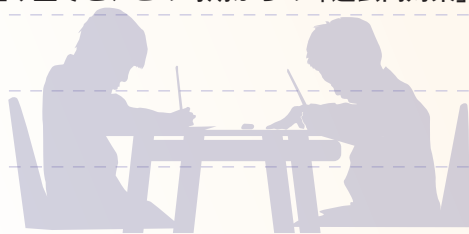
特 集

「統一合判」 5

中学入試レポート vol.

わが子のベストの 受験作戦の組み立てと、 過去問対策のポイント

6年生の統一合判テストも、この11月で5回目を迎え、あとは12月6日の第6回を最終回に残すのみとなった。2016年1～2月の入試本番まで2～3ヶ月と迫ってきたが、まだまだこれからが、“実戦的な力”を身につける段階だ。今回の成績や判定結果をバネに、目標に向けて最後のがんばりを見せてほしい。その一方で保護者は、わが子の受験校を、併願校まで含めて最終的に固めていく時期になった。今回は、そうした受験作戦の組み立てと、この時期からの「過去問対策」のポイントをご紹介します。



首都圏模試センター

「21世紀の教育改革」をリードする 私学の教育の進化に注目を！

6年生のこの時期までくると、すでにほとんどの受験生のご家庭では、お子さんの「第1志望～第2志望校」は固まってきていることだろう。今回のテスト結果からも、さまざまな手応えや、今後の課題を感じ取ることができるはずだ。

ただし何度もいうように、模試での志望校に対する判定の結果が良くても決して油断してはいけなしいし、逆に結果が予想より悪くても、いまさら動揺する必要はない。

こうした模試は、あくまでも合格可能性の一端を探るものであり、自分の学力を、ある母集団（模試の受験生）のなかで相対的に探るためのものだ。つまり、大勢の受験生のなかで「力試し」をすることで合格の目安を得て、受験勉強の励みとするためのものにほかならない。だからこそ定期的に受け続けることで、その都度何らかの手応えや課題を確かめることが大切なのだ。

そのうえで、めざす第1志望校がしっかりと胸中にあるならば、こうした模試の判定結果に関わらず、来春の入試本番まで、迷わずにそこをめざして努力を重ねていくべきだ。繰り返し述べてきたことだが、中学入試の大きな魅力は、何よりも、親子で気持ちと力を合わせ、「受けたい学校に思い切りチャレンジしていける」ことにある。

来春2016年の首都圏中学入試でも、今春の「サンデー・ショック」の揺り戻しの影響や、「2020年大学入試改革」にもつながる私学の授業改革・入試改革の動きに対する人気動向の変化をはじめ、やはり全体としては人気が錯綜し、そのなかで厳しさを増す学校が出てくるはずだ。それは難関校だけではなく、まだ中堅～中堅下位の私学のなかにも出てくるだろう。



来春2016年からはグローバルコースを新設し、英語入試も導入して注目される大妻中野。

いまの小学校6年生が大学受験に挑む2021年には、すでに大学入試の制度が変わっている。緊急課題とされる教育のグローバル化に向けて、いま日本の教育は大きな転機を迎えている。

そうした状況下で、この先の社会で求められる「21世紀型スキル」を身につけるための新たな教育を実現すべく、大胆な学校改革に踏み切る私学も増えている。そして、そうした改革に踏み出す私学ほど、中学受験生の保護者の注目を集め、一方では大学進学実績も含めた6年間の教育の成果を伸ばしている。

この数年、いわゆる「公立中高一貫校ブーム」が拡大しつつあっただけに、私立中高一貫校のほとんどは、この期に自校の教育を見つめ直し、21世紀の社会で必要とされる能力を見据え、子どもたちに何を与え、どう育てられるかを再点検したうえで、カリキュラムや指導体制を新たにするなど、学内改革を推し進めてきた。

だからこそ、いまあらためて強調したいのは、公立学校の復権策が進められる時期にあっても、今後6～7年の間（お子さんが中高6年間を過ごす間）に、公立学校をさらに大きくリードする教育展開や成果を見せてくれる私立中高一貫校が増えてくるということだ。

幅広いコミュニケーション力をもち、世界を舞台に活躍できる人間を育てる教育が求められている現在、それらの改革の方向性を当面リードして



いくのは、早くからそうした“世界標準の”教育ヘシフトする地歩を築いてきた私立中高一貫校であることは間違いない。

そうした意識のもとで、数々の学校の教育内容と成果を自ら調べ、比較検討することで、「めざす第1志望へのチャレンジ」を軸に、「第3～第5志望までの併願作戦」をしっかりと固めて、最終的に「実り多い合格を勝ち得る」ことができる。残り3ヶ月の保護者の役割は、その「併願作戦の組み立て」にあると考えてほしいのだ。

受験できる機会をフルに生かして、「万全の併願作戦」を組み立てよう！

そして、毎年繰り返し強調することだが、中学入試で“実り多い”合格を勝ち取るための「上手な受け方」のポイントは、突き詰めれば次の3点に集約できる。

それは、第1に「なるべく数多くの学校を受ける」こと。第2に「上下の幅をもって受ける」こと。第3に「(受けられる限り)最後まで明るく受け続ける」ことである。

第1の「なるべく数多く受ける」こととは「受けられるチャンスをできる限り生かして、数多くの学校(入試機会)にチャレンジすること」だ。

首都圏の約300校の私立中高一貫校が、のべ約

2,200回以上(コース制などの各回入試も含め、共学校の入試を男女それぞれに数えた場合)の入試を実施している現在だからこそ、このチャンスをフルに生かさない手はない。

ましてや受験に挑むのは、まだ調子の波もありがちな12歳の小学生。初めての入試では、あがってしまったり、緊張やプレッシャーから体調を崩してしまうなど予期しないことが起きる。それでも最終的に「必ず1校は合格できる」ような併願作戦を親がしっかりと組んであげてほしいのだ。

寒さ厳しい入試戦線のさなか、連日の受験に出かけるのは、体力的にも厳しいと考える保護者もいる。しかし、お子さん(子ども)たちは、親が考える以上にたくましく、強いものだ。

せっかく受験のチャンスがありながら、家で前日の結果を思い悩んでいるよりは、次の入試に前向きにチャレンジしていったほうが、よほど精神的にもプラスになる。連日の入試がきついのは、むしろ保護者(とくに付き添いのお母さん)だが、これが親にできる最後のサポートと考え、ご自身も体調に気をつけながら、何とかがんばっていたきたい。

上下の幅を持たせた併願が、第一志望校“合格”のステップになる！

第2のポイントは、「(難度的に)上下の幅を持たせて受ける」ことだ。いわゆる、①チャレンジ校(第1志望校)、②実力相応校、③押さえ校(滑り止め校)、の3つを、わが子の併願校のなかに最低各1校は組み込んでおくということである。

あえていうならば、この「ジグザグに受ける」併願の組み方がしっかりできれば、受験は7割方成功したということさえできる。

まだ11月初旬の段階では、第一志望校の選択(最

来春2016年入試の志望動向には大学付属校の人気上昇も目立っている(写真は法



入試問題との“相性”や“適性”をしっかりと探り、その芽を育てる！

～過去問題集と公開テストの両方を活用して、合格へもう1歩近づこう～

首都圏模試センターの小6「統一合判」模試も、この11月3日で第5回を迎えた。今回のテスト結果からも、さまざまな手応えや、今後の課題を感じ取ることができるはずだ。

受験生と保護者の皆さんは、こういった力試しの機会に、受験生集団のなかでの相対的な位置を確かめる一方で、この先は志望校の「過去問題集」によって、その学校の入試問題との“相性”や“適性”を探って（高めて）いく必要がある。

私学の入試問題は、その学校の6年間の教科指導方針や中高一貫カリキュラムを反映したもの。だとすれば、その学校の入試問題との“相性”も、その学校で学んでいくための立派な“適性”に他ならない。何より入試問題と「相性が好い」ということは、それだけ“合格”に近いということになる。

この点での“選択”がうまくいくと、模試の偏差値からは見えにくかった「合格可能性」を、グンと身近に引き寄せることが可能になる。

また、最近の中学入試問題には、それ以前と比べて、「知識の量」を問うタイプの出題は明らかに減ってきた。もちろん「知識」は大切だが、単にそれを「知っている」だけではなく、いざ入試問題と向き合ったときに、その「知識」を柔軟に使い、「自分の頭で考え」、「論理的に整理し」、「自分の言葉や図で表現させる」タイプの出題が増えている。そしてそれらの問題は、決して受験生を「振り落とす」意図で作られたものではなく、個々の小学生の持つ資質や将来への可能性を「発見し」、「引き出す」ための問題だ。

こういった受験生にとって「チャレンジしがいのある」問題が増えてきた最近の入試状況を踏まえて、各



今春からハイブリッドコースをはじめ3つのコースを新設。世界標準の21世紀型教育をめざす工学院大学附属。

自の志望校の出題の特色をつかむことができれば、これから残り3ヶ月の受験勉強の方向性や目標がはっきり見えてくる。それが励みになってくる。そしてこうなると小学生の学力は短期間でも大きく伸びるものだ。

最近では、各私学の説明会に低学年の保護者が参加するケースも多くなってきたことから、対象学年を6年生とそれ以外に分けて別々に説明会を実施するケースも増えており、そこで入試を目前に控えた6年生の保護者に対しては、入試問題の出題方針や受験生に求める力を、具体的に詳しく説明してくれる私学が多くなった。ずばり「入試体験」という機会を設けてくれる私学も少なくない。

さらに最近の入試問題には、受験生の適性や長所を発見し、伸ばしていくために、独自のコンセプトやユニークな新形式の出題も増えてきた。

そういう意味でも、今秋の各私学の説明会にはできるだけ時間を割いて参加し、そこで話される2016年入試の出題方針（＝アドミッションポリシー）をしっかりと確かめておくことが大切なポイントになると考えておこう。

終決定）を前に、併願校すべてについて検討しきれていない保護者も多いと思うが、ぜひ、この点は頭に入れておいてほしい。

もしも合格可能性の点から第1志望校を決めきれずにいるならば、「迷わず強気でチャレンジ」していくことをお勧めしたい。とくに今回のテストのような「合格判定」の結果で、可能性が50%を超えていたならば、「受けなくては損」と考えて

もいい。

ただし、そうした決断をするならば、一方では必ず、先の「上下幅を持たせた併願」作戦をしっかり心がけておくことだ。これこそが親と子の「迷いを吹っ切り」、「合格を呼び込む」勝利への力になる。

つまり、そういう併願を確実に組み立ててあげることが、すなわち第1志望校に近づく大きなス



増える午後入試の機会を生かすコツは、集中力と覚悟と、柔軟な気持ちの切り替え！

～午後入試の可否は、すべてプラスに受け止めて翌日以降の入試に生かそう～

■2016年にも、のべ600回を越す
「午後入試」を活用するためには？

この数年の間に急速に増えてきた「午後入試」。来春2016年には、入試の実施回数で数えると「のべ600回」以上になる。とくに2月1日・2日の入試では、完全にこの「午後入試」が浸透した。さらに3日以降、あるいは1月中の入試戦線（とくに埼玉入試緒戦の1月10日・11日）にも、この「午後入試」新設の波が広がっている。実際に今春2015年入試でも、これらの午後入試の応募者総数はのべ20,000名を超え、来春2016年にはこれを上回ることが予想される。

そして来春2016年でも、さらに多くの私学で午後入試が新設される。また女子の受験校では「サンデー・ショックの揺り戻し」の動きに関連して2月1日・2日の午後入試の日程を移動する動きもあり、これらの学校の人気動向が注目される。

午前中に第一志望校（＝チャレンジ校）の入試に挑んだその当日に、もうひとつ「押さえ」の学校として、これらの午後入試を併願することには多くのメリットがある。

ただし、これらの午後入試を上手に生かすには、あらかじめ、受験生と保護者の「とにかく受けられるチャンスはフルに活用する！」という“覚悟”と“集中力”が必要になる。さらには、結果しだい翌日以降の入試に向けての「気持ちの切り替え」が求められる。どんな場合でも翌日以降の入試に前向きに挑んでいく強い気持ちが必要不可欠なものになり、午前～午後と、まさに「ダブル受験」をするわけだから、それだけの体力と精神力が必要とされる。

また、場合によって（最悪の場合）は、2日のうち



素晴らしい新校舎の完成で教育環境が整い、大学進学実績も伸ばして人気環境が増加が目立つ青稜。

に午前・午後と二つの結果がわかり、ともに不合格というケースさえあり得ることも覚悟しておくべきだ。

しかし、もともと午後入試は（受験生と保護者にとっては）、“本命”の志望校と入試日が重なる日に、午後の時間帯にもう1校受験することで、その結果をバネに、翌日以降の入試に「思い切りチャレンジする」ためのもの。その点から多くの受験生親子に活用され、入試回数も拡大してきたものだ。

そういう当初の活用目的（メリット）から考えれば、たとえどんなことがあろうとも、この結果をマイナスに受け止めてしまえば“本末転倒”だ。

もちろん、午後入試で上手く（早い段階で）合格を得られれば、それをステップに翌日の入試に強気でチャレンジしていけばよい。

しかし、万が一良くない結果であった場合でも、「一回よけいに受験の練習をした（入試に慣れた）」というくらいに考えて、プラスの気持ちでその後の受験に挑んでいく。そうした強い“覚悟”を親子で持つておく必要があるだろう。

テップになると考えていただきたいのだ。

入試本番では、最も大きな力になる 「明るく受け抜く」親子の決意！

第3のポイントは、とにかく最後まで「明るく元気に受け続ける」ことである。簡単なようでこれが意外に難しい。それでも、入試本番までに親

子でこういう覚悟を決め、実際に最後の最後まで粘り強く“受け抜く”ことができさえすれば、過去のケースでは必ず「合格を勝ち取っている」といってもいい。

実際に入試に挑むのは、まだ12歳の少年・少女。だからこそ、「明るく、前向きな」気持ちで入試にのぞめるようもってほしいのだ。いい意味での緊張感はあってもかまわない。また、「何が

2月の“後半戦”の受験チャンスにも、最後まであきらめずに挑戦しよう！

～2月4日以降にもある“合格”へのチャンス。気力で挑めば突破口は開ける～

■2016年にも後半戦に、
「意外なチャンス」や「価値ある合格」が生まれる

まず、この後半戦の入試は、見た目の競争率（＝応募倍率）は非常に高くなるケースが多いが、実際には大半の受験生が前半戦で合格を得て棄権するために、実質的な競争率（受験倍率）は決して高くはないということを知っておこう。

一般的に2月4日以降の入試では、実際にその日に受験に来る「実受験者数」は、各校の応募者の30～40パーセントまで減ることが多く、表面的な競争率よりかなり低くなる。この傾向は以前からあったが、この数年で、「複数回出願の場合の受験料割引」や「1回分の受験料で複数回出願可」といった、受験生の費用負担を軽減する措置が増えてきたことにより、受験生はあらかじめ複数回の入試に出願しやすくなり、なおさら後半戦の表面倍率は高くなる傾向にある。

つまり、そうした「見かけの競争率の高さ」を必要以上に怖がることはないということだ。たとえ前半戦の結果が思うようにいかなかったとしても、気持ちを切り替え、持てる力を十分に発揮できれば、そこにはまだまだ合格へのチャンスがある。むしろこの後半戦には、これまで以上に受験生にとってチャレンジの価値ある入試機会が数多く生まれると考えてよいだろう。よく見ればいくつも「受験(再挑戦)しがいのある」人気校の入試があることを、もう一度見直しておきたい。

確かに一般的には、後半戦における、そうした人気校の入試は（前半戦に比べて）厳しいものに



110年続いてきたグローバル教育に加えて、新たな教育の3本柱を打ち出し、来春入試では英語入試も導入して注目される女子聖学院。

なる。しかし、前半戦のうちに1校でも合格が得られていれば、その自信をバネに挑んでいける。「最後まで決してあきらめない」覚悟で粘り強くチャレンジし続けることで、そこには必ず突破口が生まれてくる。そう信じて、この後半戦で再挑戦を試みる勇気を持っていただきたいのだ。

親子で覚悟を固めて、最後の最後まで力強く「受け抜く」ことができれば、この後半戦で価値ある合格を勝ち取れる。そして、そうした後半戦で成功するためのポイントは、「少なくとも前半戦で1校は合格を勝ち取っておく」ことだ。

その自信をステップにして、なおかつこの入試期間に成長した力を「もう一度試してみたい」と、お子さん自身が思えたときにこそ、小学生は、大人が考える以上の力を発揮できる。そうしたわが子の成長と可能性を信じて、親子で勇気を持って、この後半戦に挑んでいってほしいのだ。

何でも合格を」という気持ちも大切だ。しかし、そういう強い意思が、逆に精神的負担にならないような、万が一のときの「備え」も必要だ。

現実には、ほとんどの受験生が、実力ラインより少し上の目標校に果敢にチャレンジし、1度か2度の不合格を経験することになる。それでも、そうした体験を乗り越えて、最後には立派に合格を勝ち取り、自らの力で中高一貫校への入学のパ

サポートを手に入れている。

何度もいうようだが、この時期まできたら、第1志望校は決してあきらめる必要はない。また、あきらめるべきでもない。ただし、お子さんが充実した中高6年間を過ごすことができ、しかもその資質や個性を十分に育ててくれる私学は、決してひとつだけではない。中学受験では「受かった学校が本人にとっての一流校」といわれる所以



“合格”に満点は必要ない！ 今後の「過去問対策」では、時間を有効に使い、できる問題を確実に解き切る力をつけよう！

■第1志望校の「過去問題」演習では、まだ“合格点”がとれなくてかまわない！

すでに11月になり、来春2月の入試本番まで残すところ3ヶ月となった。受験生のご家庭では、塾の授業の復習やテストの見直しと並行して、志望校の「過去問題」に取り組む時間も増えてきたことだろう。なかには、第1志望校の過去問題でまだ思うように点が取れず、気持ちにあせりが生じるケースもあると思う。

しかし、いまの段階では決して悲観することも、焦る必要もない。毎年の中学入試で、“最難関”といわれる学校に合格する受験生であっても、まだこの時期には、そうした志望校の過去問題で合格点を取れるというケースは少ないからだ。

どの塾でも、そうした難関校の入試問題を解き切ることでできる力をつけるために、実戦的な演習に取り組んでいくのがいまの時期。つまり、ここから3ヶ月間が、入試での「合格力」を本格的に養っていく、まさに正念場なのだ。

それゆえに、現時点でまだ合格点に達することができなくてもかまわない。志望校の問題傾向や出題のタイプを自分自身の肌で感じ、これから先の授業や演習のなかで、「そういえば、こういう問題が出ていたな」と気づき、一つひとつ消化できるようになっていけば、この時期の「過去問」演習は目的を達成したと考えてよい。

そのためにも、まず保護者が、それくらいのゆとりをもった気持ちで、来春の入試直前まで、落ち着いて志望校の「過去問」対策に取り組むお子さんを見守っていただきたいのだ。

■自分が「解ける」問題をすばやく探して、確実に得点していくコツをつかもう！

そして、実際に入試本番で問題用紙と向き合ったときに肝心なのは、まず素早く全体にひと通り目を通して、そのなかから「自分の解けそうな」問題を見つけて、順序よく確実に解いていく力（手順）を身につけることだ。

こういう「見きわめ」の力を身につけることは決して簡単なことではない。しかし、これまでの受験勉強に加えて、志望校



成城学園では、広大な緑豊かなキャンパスに、来春2016年2月完成予定の新校舎を建設中。新たな教育環境が整うのが楽しみだ。

の「過去問」に何度も粘り強く取り組んでいくうちに、確実にこうした力が養われていく。本人にも“勘が働く”ように感じられるときが必ずやってくる。

■“合格”に満点は必要ない！ 全体の60～65%を確実に解き切ろう

入試問題のなかから、全体の8割の「自分が解けそうな」問題にあたりをつけ、そのうち8割を正答できれば、これで全体の64パーセントが得点できることになる。ごく一部の「合格最低点が非常に高い」学校を除けば、これでほとんどの学校には合格できる。

仮に「解けそうな」問題が7割であっても、このうち9割を確実に得点できれば、それで全体の63パーセント。いまでは首都圏の中学入試の合格最低点は平均で60パーセント以下まで下がってきているので、これでほとんどの学校には十分合格できる。なかには50パーセント台の合格最低点となる学校も少なくない。

これまで何度も強調してきたことだが、“合格”には何も満点をとる必要はない。

ある時期までできたら、自分の弱点を気に病むよりも、自分の強みに自信を持って、さらに磨きをかけるくらいのスタンスが大切だ。

入試が近づいてきた時期にはもう一度この言葉を思い出して、最後まで自信をもって、志望校の対策に励んでいくようにしたい。

はそこにある。

もしも入試本番で、立ち上がり前半戦の結果が良くなくても、そこで気落ちすることなく、最後まで「明るく、前向きに」受験できるチャンスに挑戦し続けていただきたいのだ。

失敗を恐れず、受けたい学校を受けたい数だけ

受けて、その結果を決して悲観せずに親子で正面から受け止める。

そういう「迷いの吹っ切れた」気持ちで入試に向かうことができれば、来春の受験結果は必ずや喜ばしいものになるはずだ。

最新入試情報

2016 年入試状況予測&アドバイス編

ますます増える私学の「適性検査型入試」を、併願で上手に活用しよう！

～都内では来春 50 数校が実施し、千葉・神奈川・埼玉で増加。茨城でも実施校が登場～

■今春は都内30校に加え、千葉・神奈川・埼玉でも初めて私学が「適性検査型入試」を実施！

この約10年間の公立中高一貫校の新設ラッシュを受け、これら公立中高一貫校の受検生も私学の併願がしやすい「適性検査型入試」という新たな形態の入試が実施されるようになった。公立中高一貫校の「適性検査」で試される「知識を使う力」、「その場で考え自分の言葉で表現する力」を問う出題の形式で、「公立一貫対応型」「思考力型」「PISA型」といった呼称のものも含めて、こうした入試を新設する私立中高一貫校が増えてきたのだ。

すでに今春も東京都内では、こうした入試が30校以上で実施された。これらの私学の「適性検査型」入試のなかには、成績のフィードバックやポイント解説の授業をしてくれるところもあり、公立中高一貫校の受検を考えている小学生と保護者にとっては、「力試し」や「事前練習」あるいは公立受検後の「押さえ」などの併願校として大いにプラスになる。

そうした状況のもとで、今春2015年入試では、東京都以外でも初めて、千葉では聖徳大学附属女子中(松戸市。女子校)が、神奈川では横浜中(横浜市。男子校)が、埼玉では聖望学園中(飯能市。共学校)が「適性検査型入試」を実施した。

■来春2016年には首都圏で80校近い私学が「適性検査型入試(思考力入試)」実施へ！

そして来春2016年入試に向けて、東京都内ではさらに私学の「適性検査型入試」が増加。千葉・神奈川・埼玉でも実施校が増え、茨城にも初めての実施校が登場した。

折から「2020年大学入試改革」によって数年後の大学入試で求められる「思考力・判断力・表現力」が、小学生の保護者の間にも意識され始めてきたことも背景にはあるのだろう。

こうした「適性検査型入試」に限らず、共立女子が「記述型入試」を、品川女子学院が「4科目・表現力総合型入試」を実施し、光塩女子学院が「総合型」入試を独立させたことにも、各私学が今後これまで以上に「思考力・判断力・表現力」を重視し、そうした力を育てる教育姿勢を強めていく傾向を感じ取ることができる。

そうした意味でも、公立中高一貫校の受検生を中心に、多くの子どもたちにとって、こうしたタイプの入試に挑んでいく意義は大きい。

首都圏模試センターのWebサイトには、来春2016年入試の「入試要項一覧」と「入試要項変更一覧」を掲載しているので、詳しくはそちらを参考にいただきたいのだが、右に来春新設される「適性検査型(思考力型)入試」の実施校をいくつか抜粋でご紹介しておこう。



来春2016年入試では、これまで第2回で実施してきた「総合型」入試を独立させ、2月1日に第1回「総合型(2科と総合)」入試として実施する光塩女子学院。

【2016年入試での「適性検査型(思考力型)入試」新設校】(※一部抜粋)

●男子校

- ・佼成学園 2/1 〈適性検査型入試〉
2/1PM 〈適性検査型・特別奨学生入試〉

●女子校

- ・小野学園女子 2/1 〈適性[特待]第1回〉
2/1PM 〈適性[特待]第2回〉
- ・淑徳SC 2/12 〈特待[S]第4回〉
- ・東京女子学園 2/1 〈第1回P(PISA型)〉
- ・富士見丘 2/2 〈思考力入試②〉
- ・聖ヨゼフ学園 2/1PM 〈適性検査型A日程〉
2/6 〈適性検査型B日程〉

●共学校

- ・郁文館 2/1PM 〈第2回適性・特奨〉
- ・開智日本橋学園 2/1PM 〈第2回適性〉
- ・かえつ有明 2/1 〈2/1AM思考力入試〉
2/4 〈2/4AM難関思考力特待入試〉
- ・日本工大駒場 2/7 〈特別選抜「選択・適性」〉
- ・八王子学園八王子 2/1 〈東大・医進クラス①「適性検査型」〉
- ・立正大学付属立正 2/2 〈第2回・「適性」〉
- ・横須賀学院 2/1 〈適性検査型〉
- ・千葉明德 1/24 〈適性検査型入試〉
- ・二松學舎大学附属柏 1/24 〈第4回・思考力〉
- ・浦和実業学園 1/16 〈適性検査型入試〉
- ・開智未来 1/12 〈未来型(創造発信型学力と基礎学力)〉
- ・昌平 1/11PM 〈適性検査型入試〉
- ・本庄第一 1/10 〈適性検査型入試〉
- ・智学館中等教育学校 11/22 〈第1回・適性検査型〉
- ・土浦日大中等教育学校 11/28 〈千葉SAT入試〉
- ・水戸英宏 11/21 〈第1回・EIKO未来型入試〉